

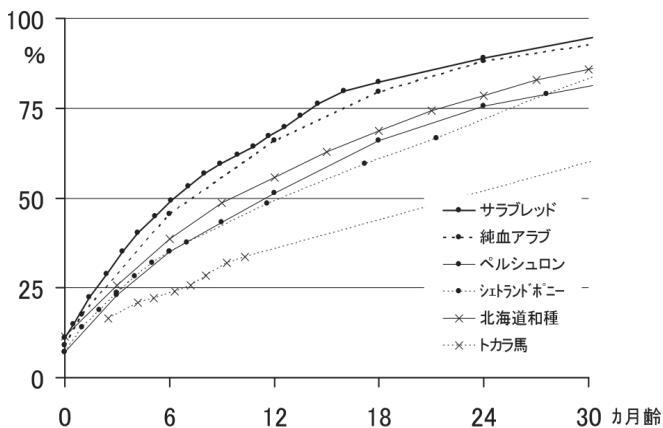
馬の発育の調査から — 海外における馬の発育 —

マンスリーレポートの18から25では、臨床獣医師のデータを元に、軽種馬の生産地における、DOD（発育期整形外科疾患：Developmental Orthopedic Disease）の発生状況についてお伝えしてきました。その中では、DODの種類、あるいは部位によって、発生時期（季節、月齢）に特徴がある事を示しました。そしてそれは、「馬の発育」にも密接な関係があるようにいわれています。

一方、JBB Aでは指導事業の一環として、日高のいくつかの牧場に体重計、側尺計を配置して、馬の発育に関するデータを集めています。これからは数回に分けて、集まったデータの分析結果などをもとに、馬の成長に関する情報を提供していこうと思います。

まずは今回集めたデータではなく、そもそも馬の品種の中で、サラブレッドはどのような発育をしているのかを体重の変化で、図-1で示しました。1トンを超えるペルシュロンや、260kgのシェトランドポニー、日本在来の北海道和種、トカラ馬と比べると、サラブレッドや純血アラブといった軽種馬に属する馬の成長は、生後の1,2年に著しく急激な事が分かります。

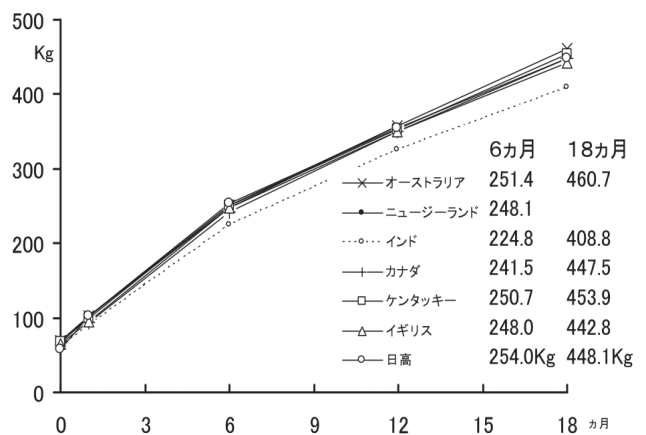
図-1 馬の品種別の体重の変化
成体重を100%とする



つぎは、世界各地のサラブレッドの成長を体重の変化で図-2に示しました。日本に来て牧場を巡回指導していただいた、KER（米国、ケンタッキー・エクワイン・リサーチ）のペーガン先生らが、世界各地の150を超えるサラブレッド牧場から、集めたデータ（Brown-Douglas and Pagan, 2007）を元に示した図です。カナダのデータは、かなり古いのですが、別の文献（Hintzら、1979）から引用しました。日本のデータは現在集めているデータです。

現代の日本のサラブレッドも、競馬先進国と言われている米国や英国のデータに劣っていることはありません。18ヵ月齢の体重データでは、日本の馬は、英国と、ケンタッキーの間くらいとなっています。6ヵ月齢では、むしろ英国や、ケンタッキーを超えています。南半球の豪州やニュージーランドは、温暖な気候によるのか、英国や米国よりも早く大きくなっています。一方インドでは、サラブレッドにとっては暑すぎるのか、大きく育っていません。

図-2 世界のサラブレッドの体重変化



気候については、世界各地の気温の変化について、月別の平均最高最低気温を図-3で示しました。日高は、英国（ロンドン：ニューマーケット）や米国（ケンタッキー：レキシントン）の馬産地に比較すると冬の寒さが厳しく、むしろカナダ（オタワ）に似た気候と言えます。気候の違いは、その土地の牧草の生育ばかりでなく、極端な寒さや暑さは、馬にもストレスを与え、成長に影響すると考えられます。

体重を多くする事だけが「出来のいい馬」の基準ではありませんし、DODの発生にも影響しているのですが、世界各地で「出来のいい馬」を生産していくためには、その気候にあった、あるいはその短所を克服するような、飼養技術の向上が考えられているのだと思います。

図-3 世界各地のサラブレッド生産地の気候
月別の平均最高気温と平均最低気温

